

## ◇懇談会

# 思い出：「追悼記念式の発端」

1951年旧制専門学校経済科卒業 坂本 譲

少ない時間ですが、ご指名により思い出話を一つ、二つ述べさせていただきます。

このスピーチのためのメモを用意しましたが、そこには1行目に「やっとここまで10年間」と書いています。今日、この追悼式の実現まで10年かかりました。どうしてかという、私は学生時代にラグビー部に所属していた関係で『西南学院大学ラグ



追悼記念式に至った理由を語る坂本さん

ビー部史—80年のあゆみ』の編集を担当することになりまして、その部史を作るのにいろいろ苦勞しましたが、5年を費やして2008年に発行しました。その5年間の編集で写真と名前を付け合せていったら、ある学年に戦没者が多いことに気づきました。部史の各学年の写真を合わせていくんですが、第41期の集合写真の個人を特定していったら、この中に5人。そして第42期は7人。あわせて2年で12人。たった2年で12人の戦没者がいることに気がつきました。これはどうしたことかと思いました。部史の資料収集には時間をかけて、これ以上は集めようがないというぐらい資料を集めていますからそれは自信があったのですが、この資料の集合写真の中から12人も見つけたわけです。

それで部史の編集が一段落してから、西南に向向いて「この写真はいったいどういことでしょうか。2学年で12人も亡くなるというのはおかしい話です。これは異常事態なので今日来てみました」と学生課の職員に尋ねました。その方も教務課や人事課に尋ねていただきましたけど分からない。「どうしてでしょうかね。12人も亡くなるとは異常ですね。どうしてだか分かりません」。「そう、異常だから聞きに来たんです。あなたが分からないで、私に分かるはずはない」(笑)と言ったらいろいろ検討されて、「あ、これは戦時中の学徒動員じゃないでしょうか。特攻隊で参戦した西南学院の学生もいたと聞いていますからその戦没者でしょう」ということでした。「な

るほどそれで分かりました。しかしどこで、誰が死んでいるのですか」と聞いたら、「わかりません」と答えられました。「でも出征するときは繰り上げ卒業だから、その月まで授業料は取っているでしょう。」「取っています」と。「それでも分からないというのですね。学徒動員で出征した人はかわいそうです」。それで何とかできないかというのがそもそもの発端で、それから5年経って、あわせると、部史の中に学徒動員の戦没者を見つけて10年かかって今日の追悼記念式に至ったわけでございます。

しかし当時の西南学院は福岡女学院と並んで廃校になっても止む無しという教育界の見方でしたから、西南学院は奉安殿を建築したり、学制改革で地元3校の福岡高等商業学校、九州専門学校と西南学院高等学部を統合しなさいという勧告を受けましたが、西南学院は水町院長はじめ教職員のご尽力により合併は免れました。しかし一番ひどいときは西南学院商業学校が西南学院工業学校に変更されてしまい、教科書は届いたけど誰が教えるのか、という状況でした。西南学院はそんな苦労を経験しており、一生懸命に学校や学生を守ったのです。この12人の人たちはそんなことを知らずに、ラグビー部のことだけを言うなら、練習が終わってグラウンドでスパイクを脱ぎながら「今日はきつかったね」と話しているところに海軍少尉殿が運動場に来られました。「今は国難の時である。この戦争に君たちの力を貸してほしいから今日は来た。申込書は学校に預けているから、希望があったらぜひ来てくれないか」と勧誘に来られました。「そういうことか。お前も行くか」「おう、俺も行くか」ということで仲良く署名して申込書を提出してきました。そうして多くの学徒兵が犠牲になりました。今日ここに来られたご遺族の中に浦亨さんという方がおられまして、そのお兄様の浦雅明さんがラグビー部だったのですが、昭和20年3月28日にフィリピンのセブ島で亡くなっています。そして浦さんがおっしゃるには、ラグビー部の部員たちは本当に仲がよかったので、みんなが軍隊に行くならと申込んだ。そして亡くなった。我々はそういうことを全く知らなかったのです。それをぜんぜん知らなくて、ラグビー部の80周年史を作る過程で、これだけ戦没者が集中しているのはこういうことだったのかとやっと分かったんです。

私は今日、式典のプログラムの中で、「戦争に協力したことは西南学院としても非常に残念なことである。と同時に今後、平和に尽くさねばならない」という言葉を数々おっしゃられまして思わず涙が出ました。本当にそうです。あの戦争はなんだったのか、単なる自国の利害によるものだったのか。そんなものではない。ここに『雲ながるる果てに一戦没海軍飛行予備学生の手記』という1冊の本がありますが、これは特攻隊として若き海軍予備学生たちが父母や恋人に書き残したものを集めた本です。あらゆる大学、専門学校の名前がありますが、この中に西南学院出身者15人が載って

います。約6,000人の学徒兵を1年間で集めて、約1,600人が昭和20年の2月から6月までの間に亡くなってしまわれた。こんな無駄なことはない。そしてそういうことを誰も知らなかった。今日、あの戦争で亡くなった方たちを思い出していただけただけでも追悼式をやる意味があったのだと思います。いろんな思いが胸に迫ってきて、本当にありがたいです。

それから私はたまたまシーズン中はラグビーで汗をかき、シーズンオフは3年の間で延べ8ヵ月間、グリークラブで歌わせていただきました。たった8ヵ月の間、歌わせていただいたおかげで、今日でも歌いたいなと思いましたが、皆さんの歌声がしっかりしていらっしゃいますので、とてもあの中に踏み込むことは無理だと思いました。今日は、男声合唱のグリークラブの皆さんと女声合唱プリエールの皆さんが歌声を響かせていただいて、私は泣きそうになりながら聞いておりました。やっと10年かかって今日ここまで漕ぎ着けることができたのは、皆さん方から、陰ながらの「坂本がんばれよ」というお力添えをいただいたからだだと思います。今日の一日は私の一生の記念になります。今から私は何をなすべきかといろいろ考えますが、とりあえずぐっすり寝て、ゆっくり起きて、それからまた次へ歩いていかないといけない。今、歩き出すと足がもつれてしまいます（笑）。本当にくたびれました。本当にくたびれましたけど、やはり10年間生きた甲斐がありました。これまでにご支援、あるいはお力添えをいただいた皆様に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(西南学院大学ラグビー部史編集委員長)